

E 国語問題

注意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっていました。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破つたり、傷ついたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

- マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。
- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
 - 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
 - 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しすぎはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
	0	0	●	0	0

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题用紙に書くこと)

否定できないことは、日本の詩の一番ポピュラーな、一番根元的な、血肉に根をおろしたふるい形式が、「短歌」だということである。これは、誰も、無理に異論を唱えることはできないだろう。

そして、シヨウチヨウはあつても、この形式が、今日猶(注1)(恐らくは、今日以降も)日本人の日本的な情操をつたえる詩歌形式として、最も身丈のあつた、肌にしつくりとしたかたち(注2)であることは、思(おも)のほかに根強い現実の事実なのである。

五七五七七の短い形式に盛られる内容は、一口に言えば、心情の吐露であつた。後代の俳句や、今様や、俗謡調にくらべて、字数の均整のうえからでも、完全なトリ(注1)アングルで、猶、余情をもつて居(お)り、素朴ではあるが、一種の莊嚴体をなしている。この形式にもられる心情がシンセリテイ(注2)を帯びるのも、また自然とおもわれる。僕らの祖先が、こうした形式をえらびとつたのが、彼らのユニークな素質によることを敢(あ)ていうのに僕(め)はやぶさかでない。

今日自由詩人の側から、この五七五七七に対して不信任をたたきつけたとしても、それが、この形式が今日の日本人の心情を盛る器として不適當になつたと簡単に詩人達が片づけるのなら、近視眼流と言わざるをえない。何故なら、今日の日本人の心情が、格別昔と変化があるわけではないからだ。

問題は別で、五七五七七の形式が、むしろ明治以後、心情を盛る器でなくなつたところに、自壊作用の因(いん)由(ゆ)があり、写生とか、思想とかこの小さな抒情詩(じやうじゆ)の形式に不適當な内容(内容)を持(も)込(こ)むことによつて、新規な試み、短歌それ自体の開拓発展を予想し実践したところに、(1)おもわぬ墓穴への道があつたのではないかと、僕は考える。短歌の創作家の側としての、多くの未開拓の素材の持込みは、一見自分を豊富にみせるようなもののそれは、不消化な満腹に他ならない。それもみな、明治文化の一種の殖民地的繁栄政策の悪影響として今日、正しく批判しなければならぬ。

結果として、今日の「短歌」は、五七五七七の詩歌形式の美を失っている。美を失った形式ならば、すでに存在を失ったと同様である。そして、事実上短歌は、明治期のロマンチズムの隆盛を境として、精緻な客観描写に淫しながらも、換言すれば、詩としてのある完成を示しながらも、「短歌形式」としては瓦解しはじめたようである。

五七五七七の形式が猶、日本人の心情を盛る器として生命をつなぐかどうかは、日本の詩歌（過現未を一括して）の発展を大きく観望する時、さほど重大なことではない。それを決定するものは、日本人の生活の今後のありかたであつて、五七五七七のわくがきゆう屈ならば、自然にそこからのりこえてゆき、そこに又新しく美しい花が咲く可能性があれば、五七五七七の美が新たな意義をもつてくるであらうし、それには「天命」も一役買っているのだ。五七五七七の形式に決定的にケチがついているように考える人たちは、短歌的抒情のなかに温存する反進歩性——即ち、反動性を怖れるからに他ならないであらう。

よきにつけ、あしきにつけ、「短歌的抒情」によつて僕らの過去の時代は、一つの調子をつけられていた。

短歌的抒情は、生命感と、詠歎がその主な基調をなしていた。生命感は、直截で、単純で、非常に素朴に人の胸をうち、詠歎は、万象にしみ入るものあわれによつて、多分に仏教的であつた。ともかくこれらの美しいウセキの抒情は、武家時代に及んで、奔放な生命を失つた。そして、懐古趣味として形骸をうけつがれた。

明治の短歌のロマンチズムは、帝国発展の時代にさしあわして、当時の復興歌人達の詠作には、多く、奈良朝時代の王朝讚美の感情がそのまま受けつがれたことは見逃せないことである。寧楽の都をうたつたころを心情として、明治の聖代をことごとく歌人の心には、寧楽から明治への一千年の溝渠が消え、一すじにつながつたところに、当時の歌人の（敢て歌人ばかりではない、一般国民の）無批判な謳歌精神があつた。

このことは、なかなか重大なことで、一概に言えば、過去の歌人にとつては、製作を錬磨するためにも、国学の研究を旨とせねばならず、国学そのものがすでに、一つの自家の思想を包蔵した学問である以上、それに対して充分な批判を向けることは困難となり、その思想の色に染められてゆくことも自然ななりゆきであらう。

ここで、歌人は、単なる歌人でありえなかつたという事実がはっきりする。即ち、歌人は、国学者であり、国粹主義者ということになる。

啄木から、口語歌を提唱する革命的歌人もあるではないかと言う反問もあることと思うが、そのことはまた改めて論ずることとして、すこしく、話を前へすすめていってみよう。新しい歌人たちは、日本の国土を觀念的な対象とするばかりでなく、それらから離れて、純粹に自然現象を対象とし、その変幻出没をおのれの心情を通して表現しようとする。①な尊い努力をする。そして、そこに、歌人の強味があるというのは、日本の歌人ほど、素朴に、しかも、繊細な眼で、鋭く、ふかく、一瞬の変化にも心をうごかして、消えゆくものを捕え、うつりゆくものを止めて、微妙に表現している芸術家は世界でもそれ程数をみない。自然は益々、作家の心をすませて、視界はいよいよ鮮明になつてゆく。そこに、立派な歌よみが出来上る。そういう歌人たちに対して、僕は尊敬をもつ。それは礼儀でさえあるだろう。

だが、問題はそれで終つてゐるわけではない。

幸福な歌人たちが、または、可憐な歌人たちが、五七五七七の清澄な玉のような短歌を一首作りあげたとき、その歌人は、例え意識しなくても、対象としたこの国の山河に心をひそめることで、この国土を愛し、その愛情が島国のため隣邦や世界とつながりをもたない理由で、孤立のために歪んだ国民の愛国心といつしよに、しらす(2)しらす(2)危険な角度の傾斜を示すに至るのだ。多くの短歌の集のなかには、ひんぴんとして、それら愛郷エゴイズムの作品を指摘することができよう。

第二次世界大戦中、国民の心情を反映して多くの歌人達の思想の根底が、露呈され、歌人たちは可成り反動的だつたようだ。歌人たちよりも多くのフアツシヨ黨員らが、その情緒の根を、②な和歌から汲みとつていたことも否定できない。

そうしたことが、③な詩人達をして、短歌抒情を排せきし、短歌抒情の封建性を抹殺せよというような言葉を吐かせるに至つたものであろう。短歌が、そうしたものを尾にひきずつてゐる以上は、抹殺を云々されて

もしかたがないかもしれないが、僕は、⁽³⁾ そうおもい切ることはできない。

芸術としての「短歌」の完成美は、まだまだ新しい詩の試作時代の詩人たちの及ぶところではなく、殊に、自然の觀察の精緻と、ローカリティについては、詩人らが大いに「短歌」の作家の作品も学ばねばならないだろう。⁽⁴⁾ 五七五七七の美しさを充分意識した上で、新しい「短歌」の発展の路は、まだ大きくのこされていることを僕は信じて疑わない。ただ、その美しさを忘れた時に、完全に「短歌」は亡びるのだ。「短歌」の方面にも、少数の立派な作家を持ちながら、全体としては、あせりすぎる結果、即ち、短歌の亡びる限界の方へいざり寄っているのではないかという気がしてならない。

初歩者のために知っておかなければならないことは、「短歌」が「短歌」として特別なものであって、一般の詩とは、別の批判の標準をもつて価値を決められなければならないと思う偏見である。特別な規約や、習慣があつてその枠を外すことを忌むのであるが、それこそ、⁽⁴⁾ な陋習^{ろうじつ}で、新しい時代の芸術の価値標準は決して、そんなことによらない。効果は充分、个性的な表現にたよるもので、立派な「短歌」は、同時に立派な詩である。詩とは、あらゆる詩型の詩を包括した詩で、詩人は短歌や俳句をつくり、短歌や俳句を作る人たちも自由に詩を作るべきものであらう。即ち、これは短歌の形式がいい、これは詩がいい、と、対象によつて変化させればいいのだ。

だから、詩壇、歌壇などの区別も本当は不必要で、お互いに友人となつて、検討しあい、詩華集^(注5)などにも「短歌」を入れるべきである。詩人の名簿も歌人と一緒にならなければ本当でない。

そして、いまにそういうことになるだろう。⁽⁵⁾

(金子光晴「短歌小感」より)

(注) 1 トリアングル——三角形。

2 シンセリテイ——誠意。

3 国学——江戸中期に興った学問。文献学的方法によって古事記、日本書紀、万葉集などの古典を研究することで、儒教・仏教
渡来以前の日本固有の文化を究明しようとした。

4 ファッショ党員——独裁的な指導者のもとで国家主義、全体主義的政治形態を主張する政党の党員。

5 詩華集——美しい詩文を選んで集めた書。

問

(A) 〓〓線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)

(B) 〓〓線部(あ)・(い)について、本文中での意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

(あ)	やぶさかでない				
		1	嫌な気がしない		
		2	確信がない		
		3	言葉を選ばない	(い)	ことほぐ
		4	努力を惜しまない		
		5	反対するつもりはない		
				1	祝福する
				2	信頼する
				3	説明する
				4	継承する
				5	崇拜する

(C) 〓〓線部(1)について。ここで筆者はなぜ「おもわぬ墓穴への道」という表現を使うのか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 荘厳体をなす器として完成の域に達していた五七五七七の形式を壊してまでも新規な試みをしようとしたことで、短歌が植民地的繁栄政策の道具になってしまったから。
- 2 日本人の心情そのものは昔からそれほど変わっていないのに、明治文化における新しい思想を盛り込もうとする運動が活発になったことで短歌が近視眼流の表現に墮したから。
- 3 五七五七七の形式に縛られているがゆえに詩としての完成を示すことができないでいた短歌を正しく批判

しようとするあまり、形式よりも思想が重視されるようになったから。

4 短歌を詩の一形態として発展させようという試みが創作家たちの間で盛んになった結果、自由詩人の側からその思想に対する批判が起こり不信任をたたきつけられたから。

5 日本人の心情を盛る器として最もしっくりしていた五七五七七の形式に写生の方法や近代の思想を盛り込もうとしたことで、短歌の形式そのものが壊れはじめたから。

(D) ——線部(2)について。「危険な角度の傾斜を示す」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 日本の山河に心を寄せ、それを無批判に謳歌する歌人たちのロマンチズムが、その純粋さゆえいとも簡単に愛国心と結びつき愛郷エゴイズムを促進させる結果になったということ。

2 対象を微細に表現しようとした歌人たちの素朴な営みそのものは、戦争に対して反動的な方向性をもっていたが、その純粋さがファッショ黨員らに政治利用されたということ。

3 消えゆくものを捕え、うつりゆくものを止めて日本の美しさを詠んだ歌人たちの取り組みが、結果として隣邦や世界とのつながりを失わせ日本を孤立の道に進ませたということ。

4 国学の研究を旨とし国粹主義の思想をもつことがあたり前とされていた歌人たちのなかに、革命的歌人が登場したことによって、和歌の世界に思想が盛り込まれるようになったということ。

5 奈良朝時代の王朝讚美の感情を脈々と受け継ぎ、日本人の心を最も象徴的に表現することができる和歌の伝統が、軍国主義の台頭によって破壊されてしまったということ。

(E) ——線部(3)について。「僕」はなぜ「そうおもい切ることはできない」のか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 島国に生きる日本人が自分たちの国土を愛し自然の美しさに心をすませたのは当然のことであり、その清澄な精神を忘れてはならないから。

2 日本の自然を素材に観察しうつりゆくものを微細に捕え作者の視界を鮮明に映し出す「短歌」は、芸術として更なる発展の可能性を残しているから。

3 第二次世界大戦中の愛郷エゴイズムは同時代に詠まれた「短歌」に深く刻まれており、それらはいまでも反面教師としての役目を担っているから。

4 芸術としての「短歌」はいまもその完成美を失っておらず、新しい詩の表現を模索する詩人たちにとっても学ぶべき点が多々あると思えるから。

5 山河に心をひそめ国民の心情を反映した「短歌」を詠んだ歌人たちの営みが、反動的な姿勢となって国家の暴走を食い止めることもあったから。

(F) 線部(4)について。本文中で「五七五七七の美しさ」を具体的に説明している一文を探し出し、初めの五字と終わりの五字(句読点を含む)をそれぞれ記せ。

(G) 空欄 ① ④ に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|
| 1 | 詩人的 | ① | 進歩的 | ② | 哀愁的 | ③ | 封建的 | ④ |
| 2 | 封建的 | ① | 詩人的 | ② | 進歩的 | ③ | 哀愁的 | ④ |
| 3 | 封建的 | ① | 進歩的 | ② | 詩人的 | ③ | 哀愁的 | ④ |
| 4 | 詩人的 | ① | 哀愁的 | ② | 進歩的 | ③ | 封建的 | ④ |
| 5 | 封建的 | ① | 進歩的 | ② | 哀愁的 | ③ | 詩人的 | ④ |
| 6 | 詩人的 | ① | 哀愁的 | ② | 封建的 | ③ | 進歩的 | ④ |

(H) 線部(5)について。その説明として適当でないものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 詩人が「短歌」や俳句のジャンルに進出することで「短歌」はさらに発展する。

2 詩壇や歌壇の区別がなくなりあらゆる詩型の表現者による交流が始まる。

3 詩と「短歌」を区別する批評の標準が取り払われる。

4 詩人は自分の個性に応じて自由に作品の形式を選べるようになる。

5 個性的な表現であるかどうか詩の芸術的価値を決めるようになる。

(I) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 明治時代の歌人たちにとって、国学の研究は自らの製作を錬磨するのに必要な手続きのひとつだった。

ロ 今日の「短歌」は、五七五七七の詩歌形式の美を失い日本人の心情を盛る器として機能していない。

ハ これからの「短歌」は、陋習に囚とらわれることなく自らの思想を自由に謳うたいあげなければならない。

ニ 「短歌的抒情」は、武家時代にその奔放な生命感を失い懐古趣味だけが形骸的に受け継がれた。

ホ 「短歌」は、五七五七七の器に心情を盛る形式を守り続けることで次の時代にも生き延びるだろう。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名を省いたところがある。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

劉^(注1)璵兄弟少時為^(注2)王愷所憎嘗召^(注3)二人宿^(注4)。璵除^(注5)之令作坑坑畢^(注6)垂^(注7)加害矣。石崇素欲^(注8)默除之令作坑坑畢垂加害矣。石崇素與^(注9)璵善聞^(注10)就愷宿知^(注11)當有變便^(注12)夜往詣^(注13)愷問^(注14)二劉所在愷卒迫^(注15)不得諱^(注16)答^(注17)云「在^(注18)後齋中眠」石便徑入^(注19)自牽^(注20)出同^(注21)車而去^(注22)語曰^(注23)「少年何以輕就^(注24)人宿」」

(劉義慶『世說新語』仇隙による)

(注)

- 1 劉璵兄弟——劉璵と劉琨。西晋時代の貴族。
- 2 王愷——西晋時代の政治家。帝室の姻戚として権勢をふるった。
- 3 垂——いまにもしそうである。
- 4 石崇——西晋時代の政治家。大富豪としても知られ、王愷と贅沢ぶりを競った。
- 5 後齋——奥の部屋。

問

(A) ——— 線部(1)の日本語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 若いころ王愷のことを憎んでいた。
- 2 若いころ王愷から憎まれていた。
- 3 王愷の憎しみを買うことは少なかった。
- 4 王愷を憎むようなことは少なかった。
- 5 わずかなことで王愷への憎しみを抱いた。

(B) ——— 線部(2)について。ここで「黙」はどのような意味を表しているか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 一言も発することなく
- 2 記憶だけをたよりに
- 3 理由を知らせずに
- 4 外部に気づかれずに
- 5 相手の意識がないうちに

(C) ——— 線部(3)の訓みとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 すこぶる
- 2 けだし
- 3 はじめて
- 4 つひに
- 5 もとより

(D) ——— 線部(4)の訓読を平仮名だけで書き表したものとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 まさにへんあらんとするをしり
- 2 しることへんあるにあたり
- 3 まさにへんあるべきをしり
- 4 まさにあるべきをしりてへんじ
- 5 しることあたればへんずることあり

(E) ——— 線部(5)について。この返答についての説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 石崇に怪しまれてもめ事になるのを恐れた王愷は、本当のことを答えた。

- 2 現状を把握していなかった王愷は、当てずっぽうのことを言うほかなかった。
- 3 劉兄弟の安眠を妨げなくなかった王愷は、事情を話して石崇に帰ってもらおうとした。
- 4 真相が露見しないよう時間稼ぎを図った王愷は、わざと嘘の内容を答えた。
- 5 石崇の急な来訪に慌てた王愷は、しかたなくありのままに答えてしまった。

(F) —— 線部(6)の発言の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 若造ども、安易に他人に泊めてもらったりしちやだめじゃないか。
- 2 若造ども、あの人が泊めてくれるものだから甘く見ていたのだな。
- 3 若い人たちは、なぜあんな浮薄な人に泊めてもらったりしたのだろう。
- 4 若い人たちは、気軽に他人に「泊めてくれ」などと言えるはずがない。
- 5 若造ども、人様に泊めてもらったからには簡単なお礼ではすまないぞ。

三 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

「男鹿なくこの山里」と詠じける嵯峨野の方に隠れたる人あり。まだつりはげの跡もきえかね、わり菱の系図咄に、甲州の剣も今は菜刀一丁の身代にて、あまりさびしきに、垣に瓢箪を植えて、折ふしの筆ついでにや、中にもしたたか物に書き付け侍る。

甲にもならで果てたるふくべかな

とは見え侍れど、身は雲水のたよりのなき浪人ひがみとぞおぼえける。

かの岡に草刈るをのこあつまり、この甲のにくさにわざと返しとはなくて、

かまきりに降参したるふくべかな

とぞ笑ひける。あるじ聞きつけて、「陋巷にあつて一瓢のたのしびは賢人の上、里の子はしるまじ」。草刈りの中

より、「その賢人くらべならば、許由はかしがましと捨てたり」とのしる。

あるじいよいよ勝に乗じて、「かかる名物もしらず、汝らは田植の煎茶を入れ、たね物の納所とおぼえたるこそ

口をしけれ。花はむつかしき色もなくて、楊墨がこころざしに叶ひ、源氏の巻の名となり、歌人の腸にまとひた

る夕顔ぞかし。「そもそも夕顔の玉椽金殿にさがりたる由緒をしらず。ただ喰物とぼしき五条あたりに徘徊して、

貧乏神の神木はこれなるべし」。

隠士がいはく、「汝宇治の物語をしらずや」。答へていはく、「その拾遺の瓢も咎なき隣人が一命をたてり。これ

全く瓢の罪といはむ」。「かかるめでたき瓢に何の罪かあらん。かれ仏縁深きゆゑ、空也上人には携へられ、鉢た

たきの祖師とはなりける」。「かのさざ波や堅田の海士が海老すくひも仏縁の内か」とぞいひける。

隠士おほきにうち腹立ちて、「汝がいひぶん、皆々理屈の論なり。かつて風雅をしらず。古人生前一瓢の楽しみ

は、身の後の金よりは勝たりといへり」。草刈りがいはく、「その楽しみといつば、上戸の情なり。瓢のかたちを

いはむ。腹便々と肥えふとりて、口のせまきは何ぞや」。「せまくて餅の入らざるは下戸のなげきなり」と大笑し

て、歌つてはいはく、「滄浪の水清めらばつけて泳ぐべし、濁らば鯰を押さゆべし」といひて、去つてともに物いはず。^(注9)

『風俗文選』による

(注)

- 1 つりはげ——髪を引きつめて結うために、額ぎわが禿げあがつているのをいう。
- 2 わり菱——甲州(山梨県) 武田家の紋。
- 3 陋巷——むさくるしく見苦しい町。また、俗世間。
- 4 許由——中国古代の伝説上の高士。ある人から水を汲むために瓢箪を贈られたが、許由はこれを捨ててしまったという故事がある。

- 5 楊墨——楊朱と墨翟。いずれも中国、戦国時代の思想家。ここは『淮南子』説林訓「墨子練糸を見て之に泣く。其の以て黄とすべく、以て黒とすべきが為なり」をふまえる。
- 6 宇治の物語——『宇治拾遺物語』。老婆に救われた雀が宝の瓢箪を贈って恩を返すが、欲深い隣りの女は瓢箪によって命を落とすという説話を載せる。

7 空也上人——平安中期の僧で、踊り念仏の祖。

8 鉢たたき——竹杖で瓢箪をたたき、念仏を唱えながら歩く空也堂の僧。

9 鯰を押さゆべし——瓢箪で鯰を押さえる。ぬらりくらりのたとえ。

問

(A)——線部(1)はどのような状態をいうか。最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 隠者としての悟りの境地に至っている。
- 2 隠者となつてから既に長い年月が経っている。
- 3 武士であったころの面影が残っている。
- 4 はやくも初老の風貌を備えている。

5 かつての戦で負った傷跡がまだ残っている。

(B) —— 線部(2)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 甲州で作られた立派な剣が菜刀として使われている様をみて、刀の価値を知らない者たちを蔑さげすんでいる。

2 甲州の剣豪と評された才能を家事にも存分に発揮しており、自らの有能さに気づいている。

3 かつては戦で勇ましく剣をふるったが、いまや菜刀ばかりを使う身になりはてたことを嘆じている。

4 戦でふるわれた剣もいまは菜刀として用いられており、平穏な世となったことに感慨を抱いている。

5 戦でふるう剣を菜刀に持ちかえ、同じ刀でも使用者によって用途が変化することの世の理を悟っている。

(C) —— 線部(3)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 所定めず諸所を遍歴する境遇で、たのみにするところがない浪人

2 自然を愛するがゆえ人との交流を絶ち、孤独を楽しんでいる浪人

3 万物が流転することの世の理に身をまかせている、物に執着しない浪人

4 いつもあいまいな態度でいるため、しつかりとした手応えが感じられない浪人

5 はかなく無益な事物に目先を奪われ、なににつけてもあてにならない浪人

(D) —— 線部(4)について、何に対して「にく」く思ったのか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 許可なしに瓢箪を植えて楽しんでいて、「甲」の句の詠み手の身勝手さ

2 いまの暮らしに不相応な、「甲」の句の詠み手の自尊心

3 「甲」になろうとしてかなわなかった、瓢箪の悲しい運命

4 「甲」にすらなろうとせず、戦を避けたまま終わってしまった瓢箪の臆病心

5 「甲」になれなかった瓢箪を蔑む、「甲」の句の詠み手の冷淡な態度

(E) —— 線部(5)について、この句の表現について説明したものとして最も適当なものを、次のうちから一つ選

び、番号で答えよ。

1 猛々しいかまきりと鈍重そうな瓢箪との勝負の結果を想像して楽しんでる。

2 瓢箪の上に乗っているかまきりの様子をかまきりの勝利に見立てて戯れている。

3 無防備な瓢箪は鎌を持つかまきりに負けても当然だと達観している。

4 瓢箪はかまきりの小さな鎌を相手に負けたのだと言って嘲っている。

5 瓢箪はかまきりとの戦いを避けるためにあえて降参したのだと言って称えている。

(F) 線部(6)と同じ人物を1、異なる人物を2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 嵯峨野の方に隠れたる人 ロ 浪人

ハ 草刈るをのこ ニ 隠士

(G) 線部(7)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 仰々しい 2 理屈っぽい 3 面倒くさい

4 そうぞうしい 5 うさんくさい

(H) 線部(8)の現代語訳を七字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(I) 線部(9)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 これは全て瓢箪の罪といえようか、いやいえない。

2 これは全て瓢箪の罪というつもりなのか。

3 これは全てを瓢箪の罪というようなものだ。

4 これは決して瓢箪の罪とはいえない。

5 これは完全に瓢箪の罪といえよう。

(J) 線部(10)について、隠士はなぜ「腹立ち」を覚えたのか。その理由として最も適当なものを、次のうち

から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 草刈りがことごとく故事を引いて反論するのを、むやみなこじつけに過ぎないと思つて不満を抱いたから。
- 2 草刈りに言い負かされ、風雅の心を理解していない自らの未熟を思い知り、くやしくなつたから。
- 3 源氏物語や仏教を誤つて引用して反論する草刈りの軽率な態度は、当然責められるべきものであるから。
- 4 瓢箪の欠点を具体的にあげもせず、むやみに瓢箪の否定ばかりをする草刈りの態度に嫌気がさしたから。
- 5 風雅の心を欠く故事ばかりを引用して反論する草刈りの態度には、少しも共感できなかったから。

(K) —— 線部(11)は、中国の楚の国、汚れた世で一人高潔を貫こうとする屈原と、清濁あわせのむのをよしとする漁父との折り合いのつかない議論を記した「漁父辞」の末尾の一節「漁父」乃ち歌つて曰はく、滄浪の水清めらば以て吾が纓(冠の紐)を濯ふべし、滄浪の水濁らば以て吾が足を濯ふべしと云て、遂に去つて復た与に言はず」を踏まえる。—— 線部(11)の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 隠士は「漁父辞」の教訓になぞらえて、問答のなかで気づいた瓢箪の有効な使い道を示している。
- 2 隠士は「漁父辞」をもじつて瓢箪のことに切り替え、とらえどころのないやりとりに乗じてふざけている。
- 3 隠士は「漁父辞」をあえて改変して引用し、故事を乱雑に引用した本話のやりとりの反省としている。
- 4 隠士は「漁父辞」を利用して反論することで、自らの博識を最後まで誇示しようとしている。
- 5 隠士は「漁父辞」にも通じる瓢箪の優れた性質を示すことで、自らの正当性を主張しようとしている。

(L) —— 線部(a)～(c)の文法上の意味として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|------|---|------|
| 1 | 受身 | 2 | 自発 | 3 | 尊敬 | 4 | 可能 |
| 5 | 完了 | 6 | 存続 | 7 | 打消意志 | 8 | 打消推量 |

〔以下余白〕

